

# 道心



# 音おとに惹ひかれて

山主 横山 正賢

秋になると虫の音に惹かれて無性に懐かしくなる音がある。私にとつて、聴いていて一番安らいだ音はと言えば、幼い頃の朝、ふとんのなかでうつうつしながら聴いた、寝ている部屋から三部屋向この台所から聞こえてくる、母が「トントント・トントント・トントント」と野菜をきざむ包丁がまな板を打つ音である。

日本は戦中戦後の激動する時代だったが、この音を想い出すと当時の朝ご飯の麦飯や味噌汁のにおいまで鮮明に甦る。

今の時代の子ども達は家庭のどんな音やにおいを感じているのだろうか。このように音を意識してみると考えさせられることが多い。

四十二年(昭和三十七年)私が禅昌寺に住職した頃、寺は広島で一番の歓楽街「葉研堀」に在つて、戦後まもなく建てられた仮住まいだった。若干二十五才の私はこれから伽藍の復興をしなければならぬ夢を描きながら、早朝よりお勤めを始めたのだつたが、近所の住人から「早朝から鐘や木魚の音がうるさいと抗議された。

昭和四十年四月今の東区戸坂くるめ木の高台に伽藍を移して復興した。この頃

はバス停の酒屋から寺まで約二百メートルは家がなく、お店の人が寺から聞こえてくる、鐘や太鼓・木魚の音に長閑さを感じていたようであった。

昭和五十五年(現在地に再び移転することになった時、既に住宅街となつていた)近所の方々が、お寺から聞こえてきた鐘や木魚の音、坐禅会の日の太鼓や板の音が聞こえなくなると淋しいと言われた。

数年前町内の交番から来てくれないかと電話があつて訪ねると、「近所から(約百メートルは離れている)「毎朝五時五十五分になったら寺から聞こえてくる太鼓や鐘の音がうるさい」と電話が有つた旨伝えられた。「警察としてやめなさい」と言える問題ではないが、迷惑を受けている人があることを伝えておきます。」ということであつた。

同じ音でも環境や聴き方によつて天地の差が有ることを知らされた。

最近気になる音に、電車やバスの中で辺り構わず、大声でしゃべる中高生やおばさん達の声がある、何か抑圧された物を晴らさんばかりのしゃべり方である。

ある時幹線の中で二人の中年女性が、その車両一杯に響くおしゃべりをしていて、居合わせた乗客の多くがしかめ面をして彼女たちに視線を送るのであるが、その無言の抗議に気がつかないのである、そこですぐ前の席にいた私が「貴女がた少し小さい声でお話になったら如何・・・」と勇気を奮つて言つたのだが、今度はまったくしゃべらなくなつて下車して行つた。一言言つた私も後味の悪い思いをしたことがある。

## 清音きよかなおと たまじいは魂たましいを澄すまませてくれる

もう十年くらいになるが、ほとんど毎朝坐禅に来てその後一時間くらい、早朝坐禅のない週末には朝食時間頃に来て、時にはお昼近くまで尺八を吹いて行く人がある。寺の下の道を散歩中に聞こえてくる尺八の音に惹かれて上がつてきて立派な伽藍や境内に魅せられて、檀家になつた人、坐禅会に来始めた方もある。

この尺八の音は伽藍と境内の静寂を一層幽玄へと誘つてくれる。尺八の音を毎日のように聴いていた私が、ある時ホテルでのパーティーの席で、エリザベト音楽大学教授大代啓二先生のフルートの演奏を聴いて「このフルートを禅昌寺の本堂で聴かせてほしい！」その素晴らしい音色に惹かれて、「Tsukuhina 寺」の演奏会を、平成十三年秋より始める事となつた。

四回目は今年(去る)十月二十三日フルートとチェンバロのコンサートであつた。三才の幼児から九十七才の高齢者まで、約三百五十人の聴衆が集い感動の一時を共有出来たことは、「音と人の共鳴」であつた。聴衆は口々に有り難う、有り難うまた来年を楽しみにしていると月光の下家路についた。

NPO法人「松笠山の会」、座禅会、檀家の方々のご奉仕で会場設営、音響設備、照明設備、交通整理と手作りの奉仕で無事に終わつて関係者一同随喜の一日であつた。

清音は、心を蘇らせ、人を招き、共感を覚え集う人の心を澄ませてくれた。境内が人々の歓喜に溢れた一夜であつた。



明日に、数分後に死ぬかもしれない私たち

生きていくということは常に死と背中合わせ、誰一人として一瞬後の命の保証はありません。ただ気づこうとしないだけなのです。

中国の唐時代に出た香嚴智閑という禅僧の作られた詩があります。

百計千方ただ身のためにす

知らず身はこれ塚中の塵なるを

云つとなかれ白髪に言語なしと

これはこれ 黄泉伝語の人

お葬式は、残された私が

いかに生きさるかを

死者に問われる場。

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

「百計千方ただ身のためにす」というのは我が身かわいい思いだけで生きることなのです。それほどまでに我が身かわいい思いを中心には人をあざむき、傷つけても我が田に水を引くという生き方をして、とどのつまり最後にゆきつくところは墓の一握りの土になるだけというのが「知らず身はこれ 塚中の塵なるを」というのです。

「云つとなかれ 白髪に言語なし」とこれはこれ 黄泉伝語の人」というのは白髪に言葉がないと思っちゃいけないよ。これは黄泉の国、あの世からのお迎えの人なんだという意味です。白髪が一本出できたら「そろそろお迎えに行ってもよろしいですか？」また一本増えたら「旅立ちの準備はできましたか？」とのことづけを持つてくる人だということです。それなのに頭中にお迎えが来ても、また準備ができないというのが私たちの現実の姿です。しかし、白髪だけが迎えの使者ではありません。生まれすぐの赤ん坊にお迎えが来ることもあります。健康そのものの若者にお迎えが来ることもあります。

要するに命をいただいているものはすべて死の宣告を受けている者であり、それも予告なし、まったなしの死刑囚なんだということです。ただ私たちが気づいていないだけなのです。

お葬式のいちばんたいせつな意義は？

お釈迦さまは「四馬」といって、四種類の馬にたとえてこのことを説かれました。

第一は、鞭影——御者が振り上げた鞭の影を見ただけで走りだす馬。これが駿馬で最もよい馬だということです。第二は、鞭が毛の先に触れてから走りだす馬。第三は、肉に触れてから走りだす馬。第四は、骨身に徹しないと走り出さない馬。これは驚馬だといえます。いったいこれは何を言おうとされているのでしょうか。

第一の鞭影を見て走りだす馬の類の人というのは、たとえば遠い村や町で亡くなった人があるという便りを聞いて私のことと受けとめ、うかうかしてはいられないわ、と立ち上がるができる人のことを指します。第二の毛に触れて走りだす馬の類の人というのは自分の村や町、あるいはお仕事の場で亡くなった人のあることを知って、わがことと立ち上がる人。第三の肉に触れて走りだす馬の類の人は、自分の親とか兄弟、つまり親族にお迎えが来ようやく気づく人。最後に骨身に徹しなければ走りださない馬の類の人というのは、自分自身がお迎えに来られないと気づかない人のことを言うのです。しかし、自分がお迎えに来られてからでは遅い。お葬式の意味もここにあると思います。

お葬式に会葬する方々は、少なくともこの第一から第三の部類に入る方々と言えましょう。お釈迦さまは常に、「我が身にひき比べて」とさとされました。いかなることも自分の身にひきあてて考えよとおっしゃるのです。棺の中に納められた死者の姿をまのあたりにして、私の明日の姿といたたき、わずかに与えられた今日一日、今のひと時をどう生きるべきかを真剣に問う。待ったなしの、死を目前にして今日只今の生のあるべき姿を問う。これがお葬式おける最も大切なことではないでしょうか。死を忘れたら、生もほける。普段うかうかと聞き落としていた死の足音をお迎えの人の呼び声を耳を澄まして聞く時、自分が生かされている意味を考える時、これがお葬式のとて最も大切な意義の一つだと私は思います。

# 温泉大好き！

## || 良好な体調維持に温泉入浴を ||

庭瀬 恵介

お葬式の時、私はよく遺族や会葬者にこんなお話をします。「先に逝った方が最後に自分の全心をあげて、後に残った者に残す言葉があるとしたらそれは何だと思えますか？..死ぬんだよ！あなたがたも！必ずこの日が来る。それもいつか分らない。いつ来てもいいように毎日毎時間を大切に生きなさいよ。」ではないでしょうか。この死者の遺言を心の底に

深く受けとめ、毎日を大切に生きる。それが死にゆく人の死を無駄にしないことであると同時に、亡き人への本当の供養にもなるということをお忘れなく、ださうな、安心して眠ることができるような、

後に残った者の生き方をすることこそ、いちばんの供養だとおっしゃるのです。そしてそれは、あなたが毎日、毎時間あるべきように従って大切に生きること、ことに帰するのではないのでしょうか。

※(本文は、青山俊重尼老師著「悲しみはあした花咲く」光文社より抜粋したものです。)

先日、群馬県にある草津温泉で掛流し温泉を研究する学会が開かれるとの知らせがあり出かけて来ました。

草津温泉は、明治にドイツの医学者ベルツ博士が草津を訪れ、世界に通用する温泉地として絶賛されただけあって、世界第一級の温泉であることを肌で感じる事が出来ました。

今、温泉という言葉が色々な話題を呼んでおりますが、温泉は温泉法により一定の基準が設けられております。

温泉法は、昭和二十三年に施行されましたが、その当時は自然湧出が主であり動力などを使わず自然の恵みによるものだけでした。近年、環境や自然を無視し動力などを頼りに開発が進み、利益優先の開発となつていったことが、白骨温泉・伊香保温泉・那須温泉・筋湯温泉

等々全国の温泉で消費者を裏切る行為が多く発生した要因となつています。大変残念なことだと思えます。

そこで、先に述べました掛流し温泉を真の研究が進められ法の改正も検討されようとしております。

掛流し温泉とは自然湧出による温泉を言い、その形は次の2つに分類されています。

火山地帯のある地域では、地下数メートルから数十メートルの部分に深層から上昇してきたマグマがマグマ溜りを作り、1000度C以上の高温になつている地表から侵みこんだ地下水が、この高温のマグマ層の熱で温められ、それが断層などの地下構造によつて地表に湧き出たものが火山性の自然湧出の温泉となつているもの。

それとは別に、非火山性の温泉もあり、地下は深度が深まるにつれて地温が上昇します。地温は、100メートルごとに

約3度C上昇し、地表からしみこんだ水は地下水になり地熱によつて温められて深層地下水型の温泉となつています。断層など自然の地下構造で自然湧出したものです。ただし、非火山性の温泉には、太古時代に地殻変動によつて当時の海水が地中に閉じ込められた結果、化石海水となつて溜まつた温泉があります。

これら2つの形の自然湧出が、地域により形成され利用されています。では次に、温泉等入浴することに対しての効果が医学的にも証明されているので、その点を記してみると、日本は気候的に湿度が高く四季があり寒冷期もある。寒冷期が長い地方もあることから入浴することが重要です。

しかも、日本人の体温の平均は36度C前後で、低体温体質と言われております。この低体温は免疫力を低下させ、ガン療原病アレルギーなど病気の誘引となつています。このため、予防治療には体温を上げる必要になつています。

体温が一度上昇すると、免疫力は30パーセント増強し、免疫の中枢を担つてい

る白血球の殺菌力は発熱によつて促進されています。ガン細胞では35度Cの体温で一番増殖し、逆に39度C以上で絶滅してしまいます。このために体を温めることが予防方法になります。

△人間の体温と体温の関係▽

36.5度Cー健康体の平均体温

35.5度Cーこの状態が続くと排泄機能が低下、自律神経喪失、アレルギー状態となる

35.0度Cーガン細胞がもつと増殖する体温

30.0度Cー意識消失体温

「どんな病気も温めれば治る」

医学博士・石原結実

以上の内容から

まずは、自然湧出による泉質の効果もある掛流し温泉を主に、あらゆる温泉入浴により体を温める入浴行為が免疫力を高めることとなるので、出来るだけ多く入浴をお勧め致します。

「ONSEN」という言葉を日本ブランドとして発信し世界語としたいと念じている今日この頃です。

今日この頃です。

「第4回『Tsukimi in 寺』」を聴いて

フルートコンコード広島 太田順子

素晴らしい秋晴れに恵まれた10月23日、禅昌寺本堂に於いて「第4回『Tsukimi in 寺』」のコンサートが催された。このコンサートのフルートコンコード広島の主幸・大代啓二氏の演奏に触れてフルートの音色に魅せられたご住職のご提案で始まったものであり、道心会や松笠山の会の方々の並々ならぬご尽力によって支えられている。会場の設営、交通整理、音響や照明、看板制作等々、全てが手作りで、コンサートホールで行う場合に比べて準備にうんと時間と労力が必要である。このことは、演奏者や、去年より御支援戴いているフルートコンコード広島にとつてこの上ない幸せであり、更なるステップアップを目指す発奮材料となること間違いない。

木の香り漂う本堂、沢山の緑、綺麗な空気、市内が一望できるロケーション……私自身、禅昌寺というお寺と関わりが出来て本当に嬉しく思っている。また、この日の多くの聴衆がそう感じて帰途につかれたに違いない。そして、地域の「お寺」との関わり方についても一度考え直すきっかけになったとすれば更に素晴らしいことだ。全ての関係者の方々、コンサートを熱心に聴いてくださった観客の皆様、またお忙しい中、毎年ご出演を快諾して下さるゲスト演奏者に心より御礼を申し上げます。



◆道心・趣味の会◆

短歌

● みちのくを幾曲がり来し水脈は 阿武隈川を長閑に流るる

● 胸中に螢を一つともらせて 逢えざる夫と語るまぼろし

（右の二句は第十四号に投稿されたものでしたが、誤植がありましたので、お詫びし再度掲載しました）

● 日昏れどき突堤を駆ける子等のゐて 東の間の間に黒き点となる

● まどろむに 夫のいで来て語るなし 夢中のあかりに曼珠沙華ともる

東区 矢野淑子

俳句

● ひとの身はどこやらつよし 秋桜 月のぼる地球の自転に息は止せ

東区 河野貞女

● 樟若葉 零れくる陽を掌に享けむ

● 瀬の音を添え河鹿笛 澄み渡る

● モクモクと 真実をゆく 毛虫かな

廿日市市 伊藤 順二郎

◆行事報告◆(七月～十月)

● 七月三十一日(土) お盆前諸堂掃除 多数のご参加を戴き無事済みまし

た中でもご家族連れのご奉仕もあり真にほほえましい光景でした。八月六日(金) 孟蘭盆施会法要 本堂に溢れるご参拝で賑わいました。中でもお孫さんを伴ってご参拝されるお方にはご家庭の温もりを感じさせていただきました。

● 九月三十日(木) 青山俊董尼老師の講演会は、午前午後の講座は道場大広間一杯の聴衆で一日法悦に浸りました。

◆行事案内◆(十一月～正月)

■毎月定例行事

● 上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日を予定 午後二時から

※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつもりでご参加下さい。

● 御詠歌の会

● 第二金曜日午前十時より自主練習 第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで

◎ 茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合があります。初めて参加される方は、お寺に電話にてご確認下さい。

● 日曜坐禅会 (八月はお休みです) 第一日曜日 午前九時より坐禅・茶話会 終了十時半

● 毎年定例行事

● 臘八摂心坐禅会 十二月一日～八日(朝まで) 午前六時より一炷・午後七時より

二炷

(年内の坐禅会は八日の摂心終了をもってお休みします。)

● 年末大掃除のご案内

十二月十二日(日曜日) 午後一時～三時位まで 終了後茶話会 一年の力を落すつもりでご家族と一緒にご参加下さい。

● 新春坐禅会

平成十七年元旦 午前八時より 平成十七年元旦 午前十時より

檀信徒皆様の一年のご無事を祈願する法要です。お参りされた方にお札を差し上げます。

(古いお札をご持参下さい。)

※お寺の寺務は正月五日より通常に戻ります。

◆行事予告◆

青山俊董尼老師講演会

● 二月二十七日(日)

四国八十八ヶ所

巡礼の旅(一泊二日)

● 三月五～六日・五月廿一～廿二日

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。次号原稿締切は、十二月末日までお願いします。